後れて書くが『伊呂波歌』の存在については、空海の出現より百年も前、八世紀初頭に出ていることは、僧侶間に仲ば秘密にその存在を知られていたことを、江戸時代の国学者僧契沖も指摘していることからも、弘法でないことが一つの立証である。

人麿は皇太子の教育係（春宮大夫）をした関係上、中途帰京したのは、時の誰が皇太子のお妃など、皇統を重んずる立場が、時の勢力家『藤原氏』と相容れない所もあったし、また持統皇后の勅勘を受けた為もあった。

というのは、天智天皇（三八代）の妃として差出しているが、長女の大田皇女には、大津皇子と申す方があり、容姿たくましく、詩文に長けた秀才で、朝廷内人望最っともあり、天皇の器量を持っていたとある。次女の鵜野讃良皇女（後の持統天皇四一代）には、草壁皇子という一粒種があり、これに皇位を継がせたいのは人情の常で、やがて持統の願いどうり皇太子になった。

続いて天皇（天武）のすすめで朝政に参画するようになったが、大方の人望は寧ろ大津皇子のほうにあった。晩年天皇は病気勝であったので、実際上は持統皇后が政務の実権を握っていた。

その頃、人麿が石見より上京して来て、もと春宮大夫の前歴をもっていた関係からも、大津皇子こそ次の皇太子になるべきを強く主張したので、春宮職の職員達も殆んど大部分が人麿に賛成したという。

やがて大津皇子の秀才振りを愛していた天武天皇も六八六年病没し母の大田皇女もその前に死去しているので、頼みとなる皇族は誰も居なくなった上に、天武天皇の後を継いで実力者持統皇后が第四十一代の女帝として権勢並びなき存在となったその年朱鳥二年、まだ天武天皇の仮葬の一週間後、持統新女帝は大津皇子は自分を暗殺の企てがあるとデマを流布し、大軍を向けて大津皇子を急襲して逮捕させ、訳語田の兵舎で自殺に到らしめたという。

又人麿もその一味だという容疑の許に、今までの任地『石見』の国へ流罪となり、後『水寧』に入れられ処刑されたという。『梅原猛』が、その著『水底の歌』で始めて創見を述べて、天下にショッキングを与えているのは読習人の皆知る所であろう。

次の歌で人麿の水死のことが偲ばれる。

荒波に寄りくる玉を枕に置き
われここに任りと誰か告げなむ

また岩見の国で、前回国司の役人をしていた時、笑っていた女（依羅娘子）の作った次の歌からも、水寧で死んだことが理解されであろう。

今日今日とわが待つ君は石川
貝に交りてありと言はずやも

五、人麿の流謫は女性問題を起こし、宮中の禁則を犯した廉で処罰を食ったという説もあるが、それは全く当ってなく、皇位継承問題に干渉したという容疑で失脚したことは前述のとおりである。

人麿に関連の女性は官女ではなくて素人女ばかりであるから、宮中の禁則に触れるわけはなく、従って処分される心配はないのである。

まだ都（藤原京）にいた頃、人目をしのんで会っていた女が一人あったが早く死に、後同居して子供もあった妻とも死別している。

晩年石見の国で契った人もあった。前述依羅郎女で計三人が官女でない唯の女であっただけである。

六　科がなくて死す

弘法の作だとする『伊呂波歌』は平安時代に出来た『七五調』の新文学形式で、人麿は七音を一行として作ったものであるから、平安時代の弘法の作とするのは、この七音行でも別個のものであることを理解せねばならぬわけである。これは前述しているのでここで再起の煩を避けたいものである。

七　第二の暗号

『ほをつのこめ』は（本を津能己女）へであって、本というのは、既に牢の中で万葉集の第三巻まで編募してあるので、それと一緒に、石見の国の海岸にある『津の里』（今の温泉津町）にいる自分の愛人『依羅郎女』（この地方の豪族の娘で、人麿から和歌の指導を受けて後家を契った。人麿の第三番目の妻にあたる、豪家の娘だけある教養を身につけた女性）に渡してくれという意味が篭められた暗号である。

万葉集の第一巻の　頭に持統天皇の御製から始めたのは、人麿の持統女席から最も恩　を受けた記念として、開巻第一として挙げて恩返しの意味もあり、また人麿自身の

いろはにほへと（色は匂へど）春宮大夫
ちりぬるを（散りぬるを）今は流罪の身になっている

を諷刺した深遠な人生の有為転変を述懐していることがわかる。

一面弘法の作と見る仏教哲理の諸行無常とは相通ずるものの、人麿の真情は、どこまでも科が（罪）なくして処罰を食っている免罪を訴える、無実の人の悲憤の呼びである。

八、話は飛ぶが『万葉集』を大伴家持の家集（私集）だと一般に思われているが、本当は、第一巻と第二巻の完成本と半完成の巻までが完全に人麿の手に成るもので、半完成の巻目を追補して完成した第三巻と、残りの十八巻を全部大伴家持の手を経て、現在ある歌数四四九六首を二十巻にまとめあげたのが、大伴家持の真の業績なのである。

九、伊呂波の第二の謎『ほをつのこめ』について

これは『本を津の己女』と漢字に書換えば謎の意味はよくわかるのである。人麿の流謫の場所は、始め国府の在の仁摩町へ今の太田市の西方）の韓島という島の牢に入れられてあったが、間もなく更に西方の津の里（今の温泉津町）に護送されてからは、監視も幾分寛大で町の人との歌読みや、文通も大目に見られ、ここに数年居たらしい。

津の里で出獄を予想して契った女性が出来、それがその地方の豪族の娘、依羅郎女なので、後年『伊波歌』や『二巻半の万葉集』の受取人になる大役を演ずる、極めて喫緊の存在なのである。

人麿は命下って、津の里から更に西方、江の川口（今の江津市）にある鴨山の牢に送られたのであるが、江津へ行く途中、小高い山、室神山を山越えせねばならない。そこを通称奥山といわれているので『伊呂波歌』にある『うるのおくやま』（有為の奥山）と、仏教では『有為』をさとり済ました境地（極楽世界の意に取っている）が人麿自身では、単なる通り道の奥山という場所越えをして、愈々最後のあと幾らもない、最後の死に場所の牢へと引かれ行く諦念を強めた場所位の、奥山という地名を挿入しただけであるようだ。

江津の牢に護送されてからは、第六感で処刑の近きをさとったので今までの大作『万葉集』を大伴家持の家集（私集）だと一般

を如何にして、これを後世に残すかを種々思案の場句、これは全部大切な仏書であると獄吏に申し出た。

獄吏が見ると万葉集の歌は全部漢字であるから『いわゆる万葉仮名』という漢字であるから、率直に仏書という有難いものと、獄吏のみならず一般の人も絶対的信仰の上の人生観を持っているので、人麿はこれを伝え渡すには僧でなければならないと申し出たので、直ちに付近の寺にいる僧侶を呼んで来て申し受けさせたのである。

僧侶は、それを一見して仏書でないことはわかっているが、音に聞く人麿の願いなので、その場では、そ知らぬ振りして、異って受例したが、『伊呂波歌』の謎も理解し、先が『津の星の己女』について『己女』を『己ll おのれ』と解明。『女』を『おんな』つまり愛人と判断し。津の里へ行って捜すと直ぐに『依羅郎女』という女性がわかったので、それを渡してやったのである。

前述万葉集の歌はすべて漢字であると述べたが、今一例として持統天皇の御製歌を取って見ると

二八　春過ぎて　夏来たるらし　しろたへの
衣ほしたり　天の香具山

は、

春過而　夏来良え　白妙能
衣乾有　天之香具山

となるので、獄吏は仏書と見、神聖視し、絶対的信仰尊信の心を以って僧侶を呼んで、人麿の願いを叶えてやったという。

十、万葉集編集について

朝廷では、後日『古集』などのように直接天皇や上皇などの聖旨に依った、勅撰ではないが、正一位左大臣橘諸兄の命令を受けて、大伴家持が、栄誉ある始めての大業を完成したという。

それで石見の国に人麿の撰集の保存してあることを知った朝廷では命令を以って、依羅郎女から取上げた。

大伴家持は、これを見て、第三巻目の補遺から始めて、以下第四巻から自分の手で、あと十七巻を加えて二十巻に纏めたもので、歌数の最多と秀歌揃いのことでは、後の二十一代集（八大集と十三大集のこと）の足許にも及ばないものとなった。

十一、依羅郎女は朝廷から人麿の絶念の著作も沈収されてからは、生きる望みを失してしまったといって、その後、日本海に入水して命を断ったという。

十二、補遺（一）

人麿の石見の国へ流刑中の牢は三個所であることは前述でわかるが刑死されるまで八年間の長い間、曳き廻され、正史には本名『柿本人麿呂』とは記述されずに、『佐留』又は『猿』と書かれて、『人間』扱いされて居ないのであることを付け加えたい。

唯『万葉集』だけには、どの歌にも長歌が先に出るので、肩書きを『柿本朝臣人麿作歌（長歌）一首並短歌』とあって、身分に敬意を表しているのである。

十三、補遺（二）

大伴家持。人麿が処罪を食ったことは前のとおりであるが、大伴家持も『万葉集』に処刑された人麿の歌も拾録したというので、正史から株殺され、またその息子永主が島流しの刑に処せられたという。

史蹟標木

昭和五十六年四月十九日設置

人丸神石安遺跡＝天保の頃山中龍助が歌聖柿本人麿ゆかりの神石を十三浦から運んで安置した。

嘉瀬小学校跡＝自明治２１年９月１日至大正13年１月、昭和３０年まで嘉瀬村役場庁舎。

下の切道跡＝浪岡北畠氏支配の永録３年頃、浪岡－飯詰－中里－相内－十三に至る住境道。

嘉瀬城本丸跡＝築城年月日不許なるも、南北朝時代浪岡城の支城として築かれた山城とされ、鎌倉時代南部に改められ落城後、飯詰高楯城の支城として再築される。天正十五年六月大浦為信に攻撃され廃城となる。この日城主夷人八重及び佐助主従討死し果てりという。

二ツ森＝古代人の墳墓地か修験道場か、一ツ森、二ツ森、三ツ森とあり祭壇跡とも云われる。

いごく穴跡＝天明三年（1.７８２年）からの大凶作で餓死した嘉瀬村民の大半が埋められたところ。

嘉瀬小学校創立之地＝明治１０年２月１０日飯塚宇吉宅に小学校創立。

嘉瀬東館跡＝蝦夷の柵跡とされ、飯詰高楯城北方の砦で、館守三浦權十郎重孝支配、天正十五年六月大浦為信の攻撃に落城。

嘉瀬本道跡＝四代津軽信政時代に開かれた長富－狐崎－古町を経て金木に至る道路跡。

赤　鉛　筆

編集主幹　木　下　清　一

嘉瀬ふるさとを探る会員は、史蹟や古文書を探究する専門家でもなければ、学者先生でもない嘉瀬の部落に住み、郷土を愛する者の集いである。そもそも会の発足の発端は、昭和５２年２月発行の嘉瀬小学校百年史の編集にあたって、嘉瀬の村の歩みをさぐり、百年誌の一頁に掲載したが発行を終って何か、まだ嘉瀬の歴史にもの足りなさを感じ、当時の編集の一員であった山中正津氏、木村治利氏、木下巽氏、小山内嘉一郎氏等が音頭をとって、ふるさと会が発足した。

会では発表以来、人丸神石の経緯、加勢城の探究、天明飢饉のいごく穴調査等と、足で部落内を調査してきた。調査や月例会だけでは記録に残らないではないか、議題にのぼるのは何時も小冊子発行であった。ようやく今回会員がなれぬ鉛筆をなめて文章にまとめ第１集の発行にこぎつけた。私達にとっては貴重な記録である。この小冊子が、次第の若い人達の刺激になり、嘉瀬そのものを見直すことができれば……と編集した次第。

芦野の桜が湖面に映える春、やなぎの芽の色づく春、昭和５６年の春編集を終った。が、もう頭の中は５７年の第２集発行にむけて、編集企画に走り出している。これも性分か？

金木中史会凡帖

嘉瀬ふるさとをさぐる会　会員名簿

顧問　佐野　洪
〃　木立民五郎
〃　外崎三千雄
〃　土岐　保正
会長　木村　治利
副会長　原田　石治
会員　山中　正津
〃　沢田　薫
〃　小山内嘉一郎
〃　山中　操
〃　須崎　正敏
〃　木下　俊蔵
〃　木下　巽
〃　秋元惣之進
〃　鳴海　栄
〃　沢田　政孝
〃　山中長三郎
〃　秋元　清逸
〃　秋元幸之進
〃　沢田　勝衛
会計　木立　久二
事務局　木下　清一

発行日　昭和56年6月1日
発行所　北津軽郡金木町嘉瀬
嘉瀬ふるさとをさぐる会
発行者　木　村　治　利
印刷所　青森県青森市幸畑
字松元62－3
青森コロニー印刷
(0177)　38－2021

伊藤忠吉記念図書館
1090105052